

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

NO. 98

2025. 8. 30 発行

編集責任者：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

98回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

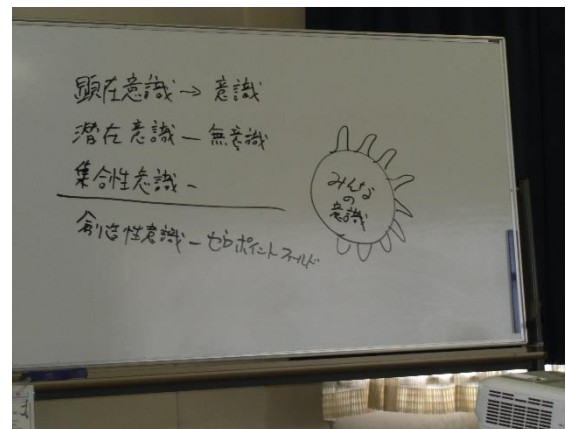
テーマ：『地域教育の創造的実践—放課後児童支援を中心に—』

講師：京 邦治 氏（NPO 法人くんぱるハウス 理事長）

8月9日（土）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において、表記のテーマでフォーラムを行いました。講師は、京 邦治 氏（NPO 法人くんぱるハウス 理事長）です。昨今、社会経済構造の変化に伴い、働き方の多様化の中で「共働き」化が定着し、幼児期の子供を取り巻く環境も大きく変化してきました。「心身共に健全な」子供を育てるという目標は、社会共通の価値観であり、取り分け「親」にとっては必須のテーマであり時代を問わず変わらない価値観であることは言うまでもないことです。且つて高度経済成長期に、「かぎっ子」という現代用語が社会問題化したことがありました。今日、子供たちの置かれた環境は、以前にも増して、経済的にも、精神的にも決して良好なものとは言えない社会状況があります。そんな社会問題、取り分け教育問題に正面から取り組んでおられる社会起業家、教育者でもある。京氏から、日々実践されておられる放課後児童支援活動から見えてくる、問題点、課題について、語っていただきました。参加者7名でした。春日井市教育委員会教育部長森本 邦博氏、市議員林 克己氏等政策意思決定のキーパーソンとなる人々の参加は、意味のある有意義なフォーラムとなりました。



講演する京 邦治氏



板書の一部

《講演要旨》 京 邦治氏に寄稿していただいたものを編集いたしました。

スターペアレンツになる思考

子どもを中心とした未来共創と自己実現の新しい在り方

AI による技術革新やグローバル化、多様化する価値観が生まれる中、今までの大人の常識、思考、あり方を持ってして果たして子どもたちの未来になり得るのか。そういった変化の視点をもって教育や子育てに臨んでいかねばならない。そのために大人が、親がどのような意識、心持ちを持つのが大変重要になってくる。従来のやり方ではAI にいい様にコントロールされた大人が子どもを育ててゆくことになりかねない、そういった面も持ち合わせている、というのが現代社会の大きな特徴であるだろう。

これらを前提に踏まえ、子育てをする親がどのような意識で子どもと向き合うのか。あなた自身は将来を不安や心配な面で捉えていますか？それともみんなが手と手を取り合い争いのない平和な世界が待っているという面で捉えていますか？この普段あまり気にも留めないような今自分が認識していることの元に意識を向け、言語化することが大切です。そのためにまず知らなければならないことは「未来はイメージしたようになる」ことです。例えば「未来はAI と共生して、めちゃくちゃ楽しくて子どもが自分のやりたいことをやれる世界になっている」と考えるのか、「給料は上がらないし、自然災害は多いし、生活はどんどん苦しくなる、AI が我々人間よりも優れて生きる道がなくなるんじゃないのか」と考えるかで未来の進む道は変わり、結果も変わります。自分の進みたい未来の方向性をどう決めるのかです。

このように一人一人が考えたような未来がきちんとやってくる、ということが分かってきたのです。いわゆる目に見えない世界の話が科学的に証明されてきました。それが「量子力学」という物理学の学問です。量子力学については各自調べてくださればよいと思うので、割愛しますがごくごく簡単に記すと今、我々が目にしている物質、現象というのは自らが言葉で意識したことによって認識できるように形になっているということなのです。

ですから、子育てをする親の根本の意識が「楽しい」のか「心配」なのか、「愛」なのか「不安」なのかによって躰も教育法も、見る未来も変わり、子どもの未来がある一定の部分で決まってきます。

もちろん子どもが親と逆の意識を持てば変わることですが親の影響というのは子にとって計り知れないものです。人生において何らかのきっかけがない限り、ずっと捉われていくものでしょう。子を見れば親が分かり、親を見れば子が分かるというように、親が意識を正しく持つことが最善の子育てに繋がります。また、親がまずは自分の人生を楽しく意識することが必要になってきます。子は親の背中を見て育つという言葉がありますよね。親が毎日疲れ果て、苦しそうに生きているのを見た子どもが夢を持つ、やりたいことをやるという発想に行きつくのか・・・疑問が生まれます。だから自分のお父さんお母さんが日々充実した姿を見せることだけで子どもはオートで自立するきっかけになるのです。

さて、現代の教育の主軸として「子どもの主体性」を尊重した教育が実践されています。一方、現場で見守る子どもを例にしても、「やってもらえろ」気持ちが強く、何をするにも指示、答えを仰ぐ「依存傾向」が見て取れます。これは、親が先述した「不安」ベースを軸にした将来設計をしていることが少なからず影響しており、安心安全の元、子どものリスク回避を選択した結果、子どもは何も考えなくとも指示を待っていればいいという無意識レベルで習慣化しているこの傾向が強くなったとも言えるでしょう。

ここで親の意識ポイント整理すると、親は「愛」（許し、認め、受け入れる）を軸に明るい未来イメージを、親は自分の人生を楽しんでいるのを子どもに行動で伝える親は子どもの存在を認めるになります。

子どもの良くない行動はきちんと導くべきですが、勉強ができようができまいが、言うことを聞こうが聞かまいが、ここに居ていいという存在だけは認めるべきです。これは忘れてはいけません。存在を認めるだけで子どもは正しく生きようになります。

このように提唱するには理由があります。これまではできる限り人との交流を避ける「分断社会」でした。そして、絶えず、イエスノー、善悪、正負、加害者被害者という両極端に立って争いを起こし続けている時代が続きました。しかし、多くの若者と話すところ「もう争いをしたくない」という言葉を多く聞きます。私の趣味である歴史の探求の中で、たまたま「縄文」というワードが浮かび上がりました。この縄文時代というのは1万5千年もの間あらゆる多様性を受け入れつつも争うことなく続いた時代と言われております。縄文時代はヒエラルキーよりもみんなで力を合わせて生き抜いた「協力社会」だったこともわかっています。

この協力社会が日本的でかつ、これからのあるべき社会になるであろうと私は考えます。それを実現するためには「子どもを真ん中にする」ことがみんなが手を取りあう社会の実現に向けたポイントになると思っています。協力社会には多世代がそれぞれで交わるのではなく、多世代が共感し互いの役割、経験、を発揮し、実現できるとも考え、多世代が一つにまとまるには子どもを真ん中に、子どもの未来への懸け橋となる想いを共通項に形作られるのが理想です。

そのために必要なものが「居場所」です。これは子どもはもちろん、おじいちゃんおばあちゃん、おじさんおばさん、と地域で互いの顔と名前くらいは知っているという空間を作り出すための居場所です。多世代が一つの場所に一緒に居る。今も公立、民間視点からしても各世代ごとの施設というのは非常に多く存在しています。それぞれがそれぞれの世代と交流するのみにとどまっております。これをいかに横の連携を作り、多世代交流の場所づくり、環境づくり、コミュニティ作りができるのか、が今後の課題と実践テーマになるでしょう。

このような多世代がつながる居場所—コミュニティを春日井市がモデルベースとなるために施設間の共創により、可能性が高まると考えます。

このような構想を私の話を聞いて「イメージを共有し、ワクワクできる」という意識に言葉で作り出すことができるかどうか。より多くの人が同じイメージを意識できたときに必ず実現、現象となって現れるのです。

あなたはなぜ、人生を生きているのか、あなたは何を後世に残すのか、あなたの経験を子供にどう伝えるのか、あなたの意志でこの地域をどう残し、つなげるのか。

それはもう、不安とか心配ではなく、愛の軸で意識し、誰かのために自分を発揮するという自己実現にもつながることになります。

さあ、我々大人たち！子どもたちのために未来を、社会を、意識をアップデートしましょう！

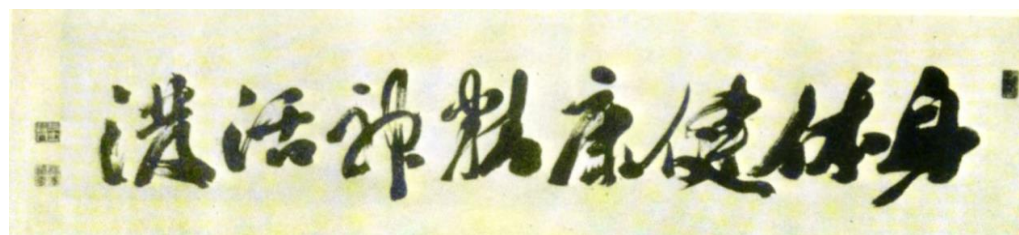
OPINION

今日の教育問題を考える

—福澤諭吉の教育観から学ぶこと・くんばる式教育観との共通点—

京氏の言う「親の意識」が子供に反映されて行く。という考え方は、全く正論であり、私も同意できる理論です。教育の原点は、親であり、その家庭にあるということです。その原点を、福澤諭吉の教育観に見ることができます。福澤諭吉は、1835年1月10日～1901年2月3日66歳歿 日本近代化を推し進めた啓蒙思想家であり、慶應義塾を創立した教育者です。「独立自尊」「一身独立して一国独立す」を基本的理念として、個人の自主・自立を説きました。

明治9年『家庭叢談』という雑誌を発刊しています。B6判の小冊子です。福澤は、世間に先駆けて「家庭」と言う熟語を使って家庭教育の重要性を説きました。『家庭叢談』によれば、家庭の二大構成要素は、夫婦と親子である。と述べています。夫婦と親子それぞれの間を律する旧い原理（道徳）を批判して新しい道徳を導き出しています。大前提として「自主自由の道」をあげています。この大前提から夫婦親子の間の人倫が導き出されています。



身体健康精神活潑

上図写真の扁額は、福澤の教育観の基本的考え方を示すものです。福澤邸に来訪する千客万来の訪問客に揮毫しています。この地方では、小牧市立小牧小学校の職員室正面に掲げられています。現在も、小牧小学校の校訓となっています。

「先ずは獸身を成しその後人心を養う」

健康こそ自立の基本であることを説きます。「学問を勉強して半死半生の色の青い大
学者になって帰ってくるより、筋骨たくましき無学文盲なものになって帰って来い。その
方がよほど喜ばしい。かりそめにも無法なことをして勉強しすぎるな。」（「福翁自伝」）
長男、次男がアメリカへ留学するときに言い聞かせたもので、福澤独特の極端な言い回し
でわかりやすく説いています。現代の文武両道のススメと言ったところでしょう。

「人倫の大本は夫婦である」

男女同権・一夫一婦制こそ人倫の基本である。福澤は、人権の平等を認め合う夫婦親子
によって営まれる生活の場でなければならないのであると説きます。

親の意識、態度、姿勢が子供に影響を与えることを主張しています。

「家庭は社会の学校なり」

「子供が家庭にあって日夜見習うのは、父母のなすことと、家風（生活の営み方、家庭
の雰囲気）であり、一家の風は父母の心でもってできるものであるから、子供の習慣はま
ったく父母の一心に依存しているといっている。『故に一家は習慣の学校なり、父母は習慣
の教師なり』“そしてこの習慣の学校は教授の学校よりもさらに有力にして、実効を奏する
こときわめて切実なるものがあるのである。”（明治 11 年『福澤文集・教育の事一』全④
p399）

『くんばる式』—どう自立へ向かわせるか—京 邦治氏教育論

京 邦治著『おそだて』（2022 年デザインエッグ株式会社）の中から、参照してみました。

くんばるハウスの教育理念は「大人になったら自立する」です。
自立ってなんだろうと思いますが、単純に親に頼らず己の力で生活できるようになるこ
とであると考えます。親のすねをかじるほどみっともない、カッコ悪いと思わないと人
していかなと思います。では、将来自立することを目的とした場合、何がそのとっかかり
となるのでしょうか？

「やってみること」です。

豊かで便利な世の中になり、自分でやらなくてもやってもらえる社会になり、暮らしは楽
になりました。その反面、生活の中で「やってみる」という経験が非常にすくなくなりま

した。やらないままでは自分の血となり肉とならず、中身のない人間になってしまうでしょう。やってみること、当たり前ですがこの一步が大人になればなるほど難しくなります。

子どもの自由で垣根の低いうちにできる限り興味をもたせやってみるクセをつける環境を作ることが大事です。

「習慣から自信に」

自分でやったことを繰り返すことで当たり前になり、気づけば人並み、もしくはそれ以上、ということになります。この「ほんの少しでも人よりできる」や「みんなと同じようにできるようになった」というのがいつかどこかでふと自分の心を支えてくれる「自信」になります。「自分はできるんだ」という経験があることで、社会へ出て、クシャとつぶれず踏ん張って、自分で生活ができる自立した人間になるのです。

従来の既定路線ではなく、やりたいことを通して社会で自立していける人間に育てることが第一になってくる時代だと考えています。



NP0 法人くんぼるハウスの教育理念「万事人を憂う」

『万事人を憂う』—子供への愛の眼差し—

勉強も必要な要素ですが、勉強ができればできた人間だなんて保証はありません。学力があっても幸せや成功のみちとは必ずしも限りません。やはり「人として」を一番大切に子供と向き合うことが必要だと思います。「人として」は、漠然としていますね。私は言葉も必要ですが、言葉で言いつくせない感覚めいたもの、感じ取るもの、第六感というような言葉にするなら「心」を指していると思います。人に優しくしなさい、譲り合いなさい人の痛みを感じなさい、困った人がいたら手を差し伸べなさい、約束は守りなさい等、はるか昔の日本で伝えつなげられてきたことです。子供たちが最も高い集中力と意欲を持って臨めるものが遊びです。色々な遊びの中から「人として」の要素を学びます。

(文責：河地 清)

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学 検 索